

# ペプシノゲン検査について

ペプシノゲン検査は、主に胃がんのスクリーニング目的で行う検査です。ペプシノゲンの基準値には個人差があるため、以下のように単体の数値のみでなく、I/II比をみて判定します。

## ペプシノゲン判定基準

	強陽性 (判定E)	陽性 (判定C)	弱陽性 (判定C) 以下のどちらかに該当	陰性 (判定A)
ペプシノゲン I	30.0ng/ml以下	70.0ng/ml以下	40.0ng/ml以下	左記に非該当であればA
かつ/または	かつ	かつ	または	
ペプシノゲン I/II	2.0以下	3.0以下	2.5以下	

## ペプシノゲン検査で分かること

ペプシノゲン検査は、胃がんの有無を直接検査する方法ではありません。ペプシノゲンは胃粘膜から分泌される物質で、粘膜が萎縮した状態になると低下します。胃粘膜が萎縮(老化)し、萎縮性胃炎になると胃がんのリスクが非常に高くなります。このため、血液検査でペプシノゲンの濃度を計ることで、萎縮性胃炎を見つけ、胃がんに備えることができます。

## ペプシノゲンに I と II があるのはなぜ？

ペプシノゲン I と II で分泌部位が異なるため、両方の検査を行うことで、胃全体の状態を把握することができます。ペプシノゲン検査が、必ずしも胃がんの発見に結びつくことはありませんし、陰性と判断されても胃がんが見つかることがあります。

ペプシノゲン I  
主として胃底腺の主細胞より分泌されます。

ペプシノゲン II  
胃全体より分泌

## ピロリ菌と胃がんの関係

胃がんになった日本人の多くからピロリ菌が発見され、胃がんや胃潰瘍との関係が指摘されています。

健常な胃がピロリ菌に感染すると胃粘膜の炎症を起こし、さらに慢性に経過すると胃粘膜の萎縮をきたし、進行すると胃がんのリスクが高まることが分かっています。

ただし、ピロリ菌に感染した人のなかで胃がんになる人はごく一部ですので、ピロリ菌に感染したからと言って、胃がんになるとは限りません。

参考: 日本対がん協会